

「あの幻妻の目も鼻も置き所が間違ふとるわい、町に居るでえゝが山に居れば獵人が猪と間違ふて鐵砲でうつぞ」

「そう云ひさるな、へちやでもえゝぢやないか、色が白けりや肌もえゝは、立つて喰ふ壽司もすし〜と云ふぢやでの方」

「何馬鹿言か、立つて喰ふ壽司もすし〜と云ふ事があるか」

「何、卷た壽司もあれば箱の壽司もあるで、立つて喰ふ壽司もすし〜ぢや」

「馬鹿、それも云ふなら、蓼喰ふ虫もむしむしぢや」

「兩方も間違ふてる。」

「勘六さん——大阪へ行つてやつたらナア——小倉屋のびん附けを買ふて来てお呉れ」

「何を吐す、おのれ等の頭にびん附けが性に合ふか、馬の糞を塗附て置け、馬の糞を……………」

「待つてゝやわいナア——」

「われの様なかぼちやに誰が待つてるかや」

「柳屋の絹松さんが……………」

「錢を待つてるぢやわい——錢を……………」

「コレ太三郎、あの幻妻はわれの幻妻か、此の間大阪へ行た時、國元の妹に筭を買ふてやるで錢を貸

せと云ふたが、あの幻妻に買ふてやつたんぢやろ、オーイ幻妻——太三郎に筭を買ふて貰ふたかよ

——あれ赤い顔をして顔を隠す、おかしやなく、(歌)いわれ、抱いて寝もせにやナア——暇も呉れずよ——それぢや港のな、つなぎ船よ——やれさよい〜よ——」

「オイお客さんよ、苦をまくつて何を仕なさるね、何茶を呉れと云ひなさるのか、船に乗ると茶を呉れ、お前さんに飲さうと思ふて沸した茶ぢやありません、欲しけりや上げますが汲みなされ、何汲むのが邪魔ぢやて、何を吐すぞ其方が邪魔なら此方も邪魔ぢや、其所で水を喰ふて土左衛門になつて仕舞へ、くそめ、オ、お女中、今時分其の様な所から潜り出て何を仕なさるね……………何、バリをハヂキなさるのか危ない事を仕なさるな、お尻をニユツと出しなされ、船櫃へバリをハヂクとかゝつたら船玉さんの罰が當りますぜ、河中ぢや誰も見てる者はありやせぬ、ズツと出しなされズツと出したか色が白いな……………」(ドブン)

「馬鹿よ、色が白いと云ふて川へ飛込む奴があるか、上つて来いよ……………」

「お客さんよ、何程でもえゝで船頭が貰ふのぢやない川堀りの役錢ぢやでお頼申します、お客さん何程でもえゝで、モンお客さん、今迄チャヤクチャ〜と云ふて居て錢の事を云や直ぐ寝た態を仕なさる、起きなされ……………何ぢや人かと思へば誰ぢや、荷物に筭をきせて置くのは、いや、んとせ……………(歌)いわれ二度は裏壁な——三度は、なぢみよ——淀の車がいなヨ——くるく——るとよ——